

# 第二次大戦末期の国頭村字奥における旧日本陸軍の薪炭生産

森林総合研究所関西支所・北海道大学大学院農学院 齋藤 和彦

Charcoal production by Japanese Army at Oku, Kunigami-village in the end of WWII.

Kazuhiko SAITO (FFPRI Kansai Research Center/ Grad. School of Agri., Hokkaido Univ.)

## 1. はじめに

本研究の目的は二つある。一つは、現在のやんばるの森が、どのように成立したのかを解明するために、第二次大戦末期の戦時伐採の実態を明らかにすることであり、もう一つは、本事例のフィールドとなった国頭村字奥（以下、奥）と陸軍の炭焼部隊との関係を、奥の戦争体験の一つとして記録に残すことである。

やんばるの森の歴史は、近年、GIS技術の発展によって、地図・空中写真と聞取調査、現地調査を併用した空間的な解明が進んでいる。しかし、聞取調査については、戦時中を含む戦前期に関して、当時を知る人がいよいよ僅かとなり、難しくなっている。

そうした中、今回、木炭生産のために奥に派遣された陸軍部隊長と面談し、派遣に至る経緯や生産の実態、住民との関係を調査する機会を得た。その結果を報告する。

## 2. 既存資料のレビュー

### 1) 国頭村内の戦時伐採の記録

奥を含む国頭村内の戦時伐採の記録を字誌、個人出版誌から拾うと表-1になる。

表-1 国頭村内の戦時伐採の記録

活動時期	字	部隊	生産物	場所	伐採・炭焼	運搬	生産量	出典
1943~44	伊地/与那	-	炭	与那演習林	兵隊	-	-	5)
1944. 6~	佐手 (浜-宇嘉)	「球」貨物廠 北部分遣隊	薪	県営林	-	字民 (浜-宇嘉)	-	6)
1944. 9~	安波	「山」2中隊	材、炭	-	-	-	-	7)
?~1945. 3	安田	「山」2小隊	炭	西道2号橋付近 普久川周辺	-	字民	6000俵	8),9), 10)
1944. 10~45. 3	奥 (宜名真-楚洲)	「石」1小隊	炭薪	上原林道終点	字民・兵隊	字民	-	11)

(表中の「-」は記載無し。「?」は出典間の不一致)

沖縄では、戦前期に蓄積した森林資源が沖縄戦を前に乱伐され、特にマツは大半を失ったとされる<sup>1) 2)</sup>。用途は、リュウキュウマツが陣地の坑木等の土木建築資材、イタジイを主とする広葉樹は軍用燃料になった。今回収集できた記録は、燃料の例が多く、資材の例は少なかった。

沖縄守備軍第32軍の各部隊は、防諜上の理由から「球」、「石」等の通称号で呼ばれた。沖縄島には、おおよそ「球」、「石」、「山」の3部隊が配置され、石部隊は第62師団、山部隊は第24師団、球部隊は第32軍司令部直轄および独立混成第44旅団を主とする部隊だった。他に台湾に転出した武部隊(第9師団)が1944年10月まで配置された<sup>3) 4)</sup>。

各部隊は、第32軍が設置された1944年中に逐次編入されている。伊地/与那以外の表

ー1の活動開始時期は、その編入時期に対応していると考えられる。一方、活動終了時期の1945年3月は、米軍が上陸し、地上戦が始まった時期にあたり、関連が予想される。

部隊配置については、浜～宇嘉が球部隊、宜名真～楚洲が石部隊、安田・安波が山部隊と、隣接字をまとめた区分けで配置されている。これは上位の第32軍あるいは沖縄県等に差配して3部隊に割り振った可能性が考えられる。

やんばるの森の成り立ちを探る観点からは、伐採の場所や生産量に注目される。しかし、伐採の場所は、地名を記した例はあっても奥以外はその位置が特定されておらず、生産量は安田以外、記載がなかった。一方、住民と部隊との関係では、生産に関わる住民と部隊の役割分担や徴用手続き、契約内容に注目されるが、奥以外は記載が無いが不完全だった。

## 2) 奥の記録の特徴

通常、字誌や個人出版誌は、住民による記録であるため、部隊の正式名称や人員構成、活動経過等の詳細が記されていない場合が多い。それに対し、奥の記録<sup>11)</sup>の特徴は、奥に駐屯した部隊のメンバーからの寄稿文が掲載されており、それらの情報が得られる点にある。奥では伐採の場所も語り継がれており、炭窯跡も確認できる。また、部隊のメンバーとは、戦後、交流が続いており、追加の情報が得られる可能性もあった。

そこで、今回、GPSを用いた炭焼現場の調査(図-1)や奥の資料の分析を踏まえつつ、国頭村字奥の元区長、島田隆久氏の紹介で、当時の隊長で元陸軍中尉の畑中耕治氏から、部隊(以下、畑中隊)派遣の経緯や炭焼生産の実態、住民と部隊との関係について、2010年に2回、2012年に2回の合計4回、聞き取り調査を行った。

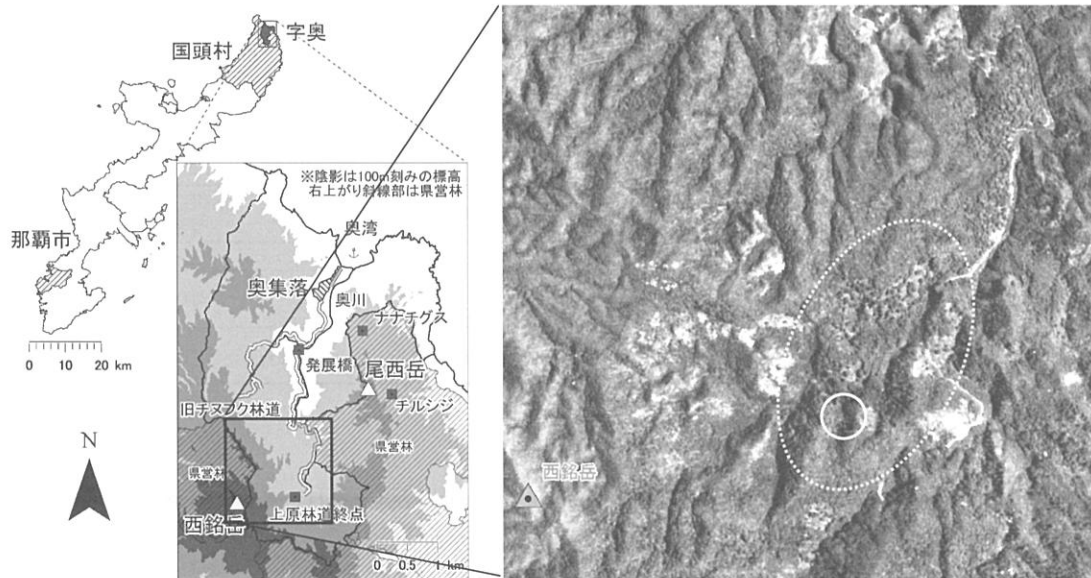


図-1 奥における第二次大戦末期の炭焼生産の場所

実線白円は畑中隊の炭窯が残る場所。点線白円は炭焼跡と推定された林分(空中写真:1946年米軍撮影 M57)

## 3. 結果

### 1) 奥派遣に至る経緯

畑中氏は1921年に京都府に生まれ、農林学校卒業後、青年学校の教員を経て、1942年に陸軍に入隊した。所属部隊は、1943年に中国山西省太原に派遣され、1944年4～7月の

河南作戦で大陸を南下後、上海から輸送船に乗り、1944年8月20日に那覇に上陸した。

沖縄での最初の任務は陣地構築で、9月から恩納村名嘉真で坑木用のリュウキュウマツの伐採を兵隊の手で行った。畑中氏は副隊長として、その指揮をした。

その後、畑中氏は奥に派遣されることになるが、その転機は、1944年10月10日の10.10空襲であった。10.10空襲で各部隊は、朝の炊事の煙を狙われた。畑中氏所属の第62師団では、急遽、壕陣地秘匿のために無煙燃料である木炭の生産部隊を編成することになり、畑中氏は農林学校卒という理由で、この急造炭焼部隊の隊長に任ぜられた。

畑中氏に対する命令は、「畑中少尉は爾今、薪炭作業隊長となり、本島最北端、奥・辺戸・宜名真・楚洲において、各部隊より差し向かう兵員及び現地徴用者（200名）を掌握し、薪炭約6tを生産すべし」<sup>11)</sup> というものであった。

## 2) 畑中隊の編成

畑中隊の構成員は、1945年3月末の米軍上陸まで入れ替わりがあったという。最終的な構成は、奥駐屯の本部が畑中氏他11名（伝令・給与・飯事・衛生・看護各1名、無線分隊6名）、生産現場を担当する辺戸分隊4名（宜名真を含む）、楚洲分隊3名、奥分隊5名の総勢24名であった。

奥への派遣は1944年10月13日で、まず、先着軍が編成され、本部要員と師団司令部との連絡用無線機（陸軍94式3号甲無線機、人力発電機付、約100kg）が、宜名真まではトラック、その後は徒歩と人力で運ばれた。

先着軍には、師団の経理担当中尉が同行し、名護の事務所（沖縄県の事務所と考えられる）で徴用の手配を行った後、連絡を受けて準備していた現地の作業班と窯作りや炭1俵の単価等、現地請負の折衝を行い、原隊復帰した。畑中氏の記憶では、木炭1俵（=1.5kg）2円50銭で契約され、奥郵便局に貯金した5万円から、労働に応じて支払われた。ただ、出征や内地への徴用で、各字には高齢者や女性、子供しか残っておらず、畑中隊は予定していた徴用者200名を集められなかった。

現場担当の分隊要員は第62師団配下の部隊から追って派遣され、10月20日に揃った。畑中隊に派遣された兵隊には良い人もいたが、扱いにくい人、あるいは良い人でも兵隊として若くない人が多く、当時23歳の畑中氏は「君らがしたいことはワシもしたい、ワシがしたいことは君らもしたかろうで、お手柔らかに」と部隊掌握に苦心したという。

## 3) 薪炭生産の実態

薪炭生産は、1944年10月25日から始まった。兵隊に炭焼技術はなく、炭焼は住民が担った。奥、辺戸、楚洲は木炭を生産したが、宜名真は木炭を生産できず、薪を出した。奥の場合、上原林道終点付近の林分で木炭生産が行われ（図-1）、その場所は奥の山係が選定した。楚洲、辺戸、宜名真の現場については、畑中氏は記憶していなかった。

現場では、山中に幕舎を建て、兵隊と地元作業班が寝食を共にすることを原則とした。一方、本隊は奥の民家を借用した。隊長の畑中氏は共同店主任宅に滞在し、共同店主任に息子のように接してもらい、区長とも非常に親しくなったという。

生産した木炭や薪は、山から港まで女性や子供も含む字民総出で搬出された。南部への輸送は、畑中隊から数量を師団司令部に無線で連絡すると徴用山原船が手配され、奥、楚

洲、宜名真（辺戸と一緒に）のそれぞれの浜から船で出荷された。最終的な生産量は、奥は2船分（t数不明）を送り、なお浜には炭俵が列をなして残っていたが、1945年3月末の空襲で焼失した。楚洲、宜名真、辺戸の生産量については、畑中氏は記憶していなかった。

#### 4) 薪炭作業隊の解散

米軍は、1945年3月25日の慶良間上陸を前に機動部隊を差し向け、3月23日から激しい空襲を行った。奥も同日から空襲を受け、学校、木炭倉庫、共同店、公会堂、住民の家屋が炎上した。煙の出る炭焼現場も空襲にさらされ、木炭生産どころではなくなり、畑中氏は「部落の人を戦争に巻き込んだら気の毒。これで結構。家に帰って家族を守って下さい」と言って薪炭作業隊を解散したという。

畑中隊には3月23日に師団司令部から原隊復帰命令が下り、現場分隊の兵隊も奥に集められた。しかし、帰路の状況がわからないため、畑中氏は部下2名と八重岳の球部隊国頭支隊に出向いた。球部隊とは以前から交流し、仲良くしていたという。結果、残波岬付近の戦闘が激しく通過困難であることがわかり、師団司令部に報告すると「国頭支隊の配下で連絡を取り合いながら、北方の敵情を報告せよ」という新たな命令が下った。

そして、この頃から住民、部隊とも、近く of 山に入り、生活を始めた。

#### 5) 避難中の奥と畑中隊の関係

山入り当初、畑中隊は上原林道終点の奥分隊の炭焼現場近くに避難した（図-2）。

米軍は1945年4月13日に辺戸上原に到達した。4月16日には水陸両用戦車で奥港に上陸し、畑中隊の避難地のすぐそばの上原林道終点まで上がってきて幕舎を構築する事態となった。畑中隊は、貴重な食料もそのままに急遽退避し、夜に尾西岳の東まで山中を移動した。移動にあたって畑中氏は「住民の近くには絶対住んではあかん」と指示した（図-2）。この理由については「やはり女性もおるし子供もおる・・・何したら名折れ。信頼されてました」と語っていた。

奥と畑中隊との親しい関係は避難後も維持され、区長や共同店主任が畑中隊の避難場所まで来て米やイモを差し入れてくれたという。奥に漂着した輸送船の乾パンやジャガイモも分けてもらい、畑のイモを掘った場合も区長への事後連絡で許された。ただ、漂着輸送船の船員を奥のサバニで内地に帰したことで、住民の米軍投降後、牛を殺して食べたこととは無断だったため、戦後の奥訪問の際に詫言っている。

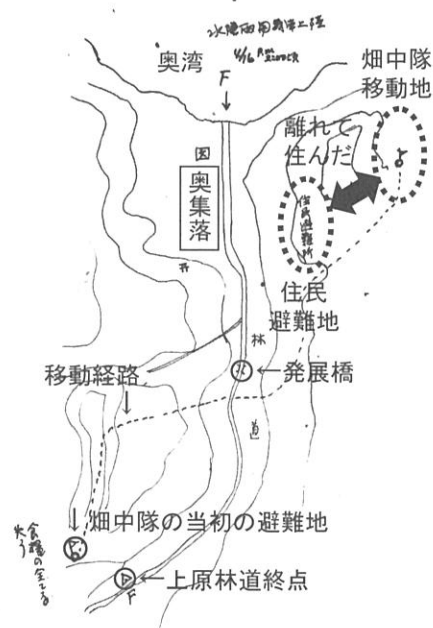


図-2 畑中隊の避難地の移動  
※畑中氏所蔵の手書き地図に加筆（活字）

#### 6) 奥住民および畑中隊の投降過程

畑中隊はラジオにもなる無線機を持っており、避難中の貴重な情報源になった。特に、

米軍の辺戸上原到達の頃からは、電波を出すと砲撃に遭うようになり、専ら熊本放送等を聞くラジオとして使われた。奥区長も、しばしば畑中隊を訪れ、ラジオを聞いたという。

沖縄戦終結の情報は、このラジオで6月23日に得ていた。そして、この情報は兵隊と奥の区長にも伝えられた。畑中氏はこの時「わしら兵隊はできんけど、あなた方は早くアメリカに降伏した方が良い」と区長に住民の投降を勧めている。

実際に奥住民が投降したのは8月であった。米軍は8月に100名規模で山焼きと山狩りを計画した。これを伝え聞いた奥の区長は部落常会で投降を決断し、奥住民と避難民、計1300人を率いて8月2日に投降した<sup>11)</sup>。畑中氏は、この決断には関与していない。

一方、畑中隊が投降したのは9月20日だった。畑中隊は、米軍の掃討作戦が活発化した7月から小集団に分かれて山中に散開していたが、投降した奥住民が9月7日に伝令となって、日本の無条件降伏と米軍の投降命令を伝えてきた。翌日、確認のために、まず、畑中氏と部下2名が一旦投降した。そこで、辺土名駐屯の海兵隊大尉から翌日に全員降伏するよう指示されたが、畑中氏は同意せず、散開した兵隊を集めるという理由で9月20日までの時間的猶予と、その間の安全を保証する文書(図-3)を獲得した。そして、帰隊後、兵隊に対し、各々が日本の敗戦を確認し、討議して結論を出すよう指示し、実際に全員の確認と討議を経て9月20日に投降した。

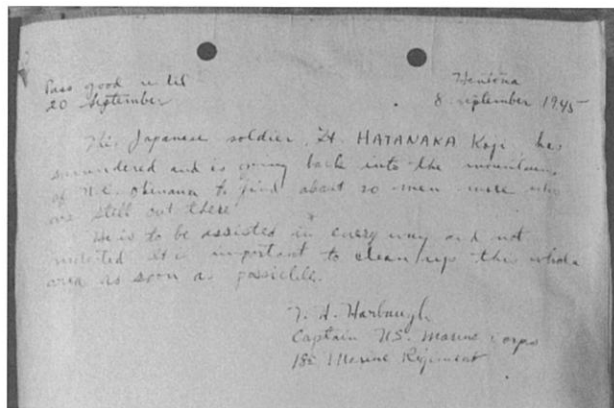


図-3 海兵隊大尉の文書<sup>12)</sup>

「9月20日まで有効。山中に残存する日本兵20名を探しに行く途中である。あらゆる方法で援助し、妨害してはならない。」

#### 4. まとめ

##### 1) 薪炭生産の実態

今回の調査の結果、炭焼部隊である畑中隊編成のきっかけは10.10空襲であり、活動終了の理由は3月末の米軍上陸前の空襲であったことが確認できた。また、徴用の手配は、名護の事務所を通じて行われ、連絡を受けた各字の作業班が部隊と単価交渉していた。名護の事務所は沖縄県の事務所と推察された。

炭焼作業については、技術を持った住民が主体となり、兵隊と住民が現場で寝食を共にして作業していた。搬出は住民総出で行われ、軍徴用の船で南部に送られていた。

奥では、伐採の場所が伝承されていたが、今回、改めて確認できた。また、その場所は奥の山係が割り振っており、戦前の村有林管理の実態が垣間見られた。楚洲、辺戸、宜名真の伐採の場所は残念ながらわからなかった。また、最終的な生産量は、奥、楚洲、辺戸、宜名真ともに十分把握できなかった。

##### 2) 奥と畑中隊の関係

今回得た情報は、畑中氏がいた奥の本部中心で、現地分隊の情報は不十分と考えられるが、奥に関しては字と部隊との関係は良好だったと言える。奥では、字が誠実に畑中隊の生産活動に協力する一方、畑中隊も、炭焼の中止や部隊避難地の移動の場面、区長へのラジオ情報提供等で奥への配慮を示している。その背景には、奥の区長や共同店主任と畑中

氏との良好な人間関係と、畑中氏への信頼があった。

また、奥と畑中隊との関係の中では、特に、畑中氏の住民の投降過程への関わりが注目される。住民の投降については、ラジオで沖縄戦終結情報を得た6月時点で、畑中氏が奥の区長に勧めていた。しかし、8月の決断には関与しておらず、奥の区長をはじめとする住民自身でなされたことが畑中氏から確認できた。

### 3) 沖縄戦が沖縄の森林資源に与えた影響解明の可能性

沖縄戦では、陣地や薪炭用材の他、飛行場設営、中南部からの避難民小屋の建設のために、戦前期に蓄積した沖縄の森林資源を消費した。その痕跡は戦後の乱伐の陰に隠れているが、当時の森林資源に与えた影響は小さくないと考えられる。しかし、関連する記述は、仲間（1984）や沖縄県（1972）の数行のみと乏しく、実態は十分把握できていない。

そうした中、今回、奥で事例調査を行ったが、今回用いた字誌を糸口に聞き取り調査、現地調査、空中写真判読を組み合わせる方法は有効であった。奥では、既にまとまった記録が字誌にあったが、それを元に改めて聞き取り調査を行った結果、部隊派遣の経緯や生産の実態、字との関係に関するより詳細な情報の他、図-2、図-3のような資料も得られた。また、GPSを用いて現地調査を行い、図-1のように空中写真との対応も確認できた。

沖縄では字誌が活発に発行されており、他の字でも奥と同じ方法が適用できると考えられる。当時を知る人の減少で、聞き取り調査はいよいよ困難になっているが、沖縄戦が沖縄の森林資源に与えた影響の解明を、可能な限り継続したい。

### 引用文献

- 1) 沖縄県：沖縄の林業, 78, 1972
- 2) 仲間勇栄：沖縄林野制度利用史, 213, 1984
- 3) 読谷村：読谷村史第五巻資料編4『戦時記録』下巻,  
<http://www.vill.yomitan.okinawa.jp/sonsi/vol05b/chap03/content/docu007.html> (2013/08/27 取得), 2002
- 4) 内閣府沖縄振興局：沖縄戦関係資料閲覧室第32軍部隊一覧,  
[http://www.okinawa-sen.go.jp/units\\_list.html](http://www.okinawa-sen.go.jp/units_list.html) (2013/08/27 取得)
- 5) 字伊地編集委員会編：あしなみの里 伊地, 83, 2010
- 6) 佐手郷友会：佐手郷友会結成30周年記念誌ぼうまく, 24, 1988
- 7) 国頭村立安波小中学校記念誌編集委員会編：創立80周年記念誌, 117, 1973
- 8) 村吉新太郎：国頭村安田の今昔, 196, 1981
- 9) 宮城鉄行：国頭村安田の歴史とシヌグ祭り, 238-239, 1993
- 10) 安田小学校百周年記念事業期成会記念誌部編：創立百周年記念誌, 167/215, 1997
- 11) 奥のあゆみ刊行委員会：字誌 奥のあゆみ, 406/424-434, 1986
- 12) 畑中氏所蔵の資料

謝辞 本調査では、畑中耕治様、ご家族の皆様の多大なご協力と、島田隆久様、字奥および字奥在那覇郷友会の皆様、元沖縄尚学高校教諭・沖縄防衛協会の山縣正明様のご支援を賜った。ここに記し、心からの感謝を表す。